「次につながるバトン」

長泉町立北小学校　五年　関口　眞央

広島の原爆ドーム、実際の建物を見たとき言葉を失った。いまでは観光スポットとして注目を浴びている広島だが、そのドームを見たしゅん間、人々の悲つうな声が聞こえてくる感じがした。「いたい」「助けて」「こわい」そのような声が私の心を深くえぐった。広島は今、とてもにぎわっている。しかし、その七五年前人々はどのような苦つうを味わったのだろうか。わたしには想像ができないし、考えたこともなかった。なぜなら、私たちは毎日が楽しく、空しゅう警報におびえて暮らすこともなく、のんびりと過ごしているのだから。なくなった人々の中には私と同じ年、私より小さい子たちがたくさんいる。その子たちが今の時代に生きていたなら、わたしたちと同じように友達と仲良く遊んでいたのだろうか。

戦争は罪のない人々が意味もなくころされてしまう。広島のようにたった一つばく弾でたくさんの命の光が消えていくことを、知った。

「広島　消えた家族」の本では、広島の笑顔にあふれた家族があった。散髪屋さんである父・鈴木六郎さん一家の六人家族は毎日笑顔で楽しく暮らしていた。お父さんの趣味は写真をとること。たくさんの家族写真をとっていた。が、あの日一九四五年八月六日一発の原子爆弾が一家の幸せを突然奪った。六郎さん一家は全滅した。栄昭くん十二才と私より小さい九才の公子ちゃんは通っていた小学校でひばく。栄昭くんは公子ちゃんをおんぶして治療所につれてゆき「後でお迎えに行くからね」とそこに預けて親戚のうちに行った。しかし、高熱を出し、数日後になくなった。その後公子ちゃんの行方はわからなくなってしまった。さらに、三才のまもるくんと昭子ちゃんは散髪屋さんで骨の状態で見つかった。お父さんの六郎さんは救護所でなくなった。救護所の名簿には「重症後死亡」と記録されていた。大やけどを負った母・ふじえさんは親戚の家にいたが、家族がみんななくなってしまったと知った時井戸に身を投げてなくなってしまった。ふじえさんのように家族が原爆で一瞬にしていなくなったら、もしたった一人生き残ったら、これからどのようにして生きたら良いのか、私も分からなくなってしまうだろう。この本を読み終わったあと私はこう思った。この六人家族は今天国で幸せなのかな、今の世の中をどう見ているのかなと。

今もウクライナとロシアの戦争は続いている。この広島の悲げきで何も学ばなかったのか。それで一体何を得られるのだろうか。私たち子どもに、そして、原ばくで亡くなった人々に理由を教えてほしい。確かに勝ったらいいこともあるかもしれない。国が裕福になるかもしれない。でもその代わりに、たくさんの人々がぎ牲になる。罪のない子たちの人生を奪うことになる。

その亡くなった人たちは自分たちに何を残したかったのか。たくさんの命の光が消えてしまったのは悔しいしつらい。だからこそ私たちがどうそれ受けとり、戦争のないくらしにどう変えるか、それば私はなくなった人々が伝えたい大事なメッセージだと思う。

わたしは、原ばくドームを初めて見た時、そしてこの本を読んだ時、亡くなった人たちの「戦争のないくらしにしてほしい」「もう自分たちのような悲劇を繰り返してほしくない」という大事なメッセージのバトンを受け取った。次の世代にも核兵器や戦争の恐ろしさを伝え、戦争というものは二度と起こしてはならないものだということを引き継いでいきたいと思う。